

はな
鼻

芥川龍之介

ぜんちないぐ はな い いけ お し もの なが ごろくすん
 禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あって
 うわくちびる うえ あご した さが かたち もと さき おな ふと
 上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。
 い ほそなが ちょうづ もの かお なか さが
 云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っている
 のである。

ごじゅっさい こ ないぐ しゃみ むかし ないどうじょうぐぶ しょく のぼ こんにち
 五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日
 ないしん しじゅう はな く や き もちろんひょうめん いま
 まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど
 き かお せんねん とうらい じょうど かつぎょう
 気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰
 そうりよ み はな しんぱい わる おも
 すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。
 じぶん はな き い こと ひと し
 それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが
 いや ないぐ にちじょう だんわ なか はな い ご で く なに
 嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よ
 おそ
 りも惧れていた。

ないぐ はな も りゆう ふた ひと じっさいてき はな なが
 内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長い
 ふべん だいいちめし く とき ひと く ひと く
 のが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食え
 はな さき かなまり なか めし
 ば、鼻の先が鏡の中の飯へとどいてしまう。

ないぐ でし ひとり ぜん むこ すわ めし く あいだじゅう ひろ いっすん
 そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸
 なが にしゃく いた はな もち あ もら こと めし
 長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を
 く い こと もち あ でし もち あ ないぐ
 食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、
 けつ ようい こと
 決して容易な事ではない。